

就活2.0

～「分からない」は悪くない～

長崎純心大学 非常勤講師／インターンシップ指導I・II 担当
長崎県産業労働部若者定着課 キャリアコーディネーター

山口 晴信

「分からない」は悪くない

「自分が何になりたいのか分からない」

就活を控えた学生がよく口にする悩みである。2018年に実施したアンケートによると、同じ悩みを持つ学生は67%。肌感覚ではもっと多そうだ。そういう学生に対し、こんな声が突き刺さる。

「大学生にもなってそんな事も分からないのか!」

これらを聞いた彼らは何を思うだろう。

「自分はこんなことも分からない人間だ..」

完璧症候群

長年学生と接して感じることもある。「完璧症候群」とも言うべきか、自分を偽っても異常なまでに「形」を作り上げようとする。「一つも穴があってはいけない!」と自分で自分を呪っている。

不完全と失敗を恐れ、ありもしない完璧を求め続け、一步を踏み出すことができない。

この呪いの根源は何なのか。それは言わずもがな、周囲のオトナ達。もちろんオトナ達も追い詰めるつもりは全くない。しかしまだ未熟な学生達は苦しみ、自己肯定感を著しく下げ、どんどん自信を失っていく。

完璧な「計画」

就活はいわゆるPDCAサイクルである。ところが多くの学生はPlan(計画)の時点で「完璧症候群」となり、次のDo(実行)に進むことができなくなってしまう。

以上のような状況にずっと疑問を感じ、私は従来のスタイルを[就活1.0]と定義し、それに代わる新たな [就活2.0]を提唱している。

実践した学生たちは、「気持ち楽になった」「就活が楽しくなった」「本当に求めているものが分かった」と述べるようになる。

また、内定後には、「納得できる就職ができた、すっきりして就活を終えることができる」等と述べ、気持ちが安定していることが伺える。

特に差が出るのが不合格になった時。[1.0]で臨んだ学生はかなり落ち込む。完璧を目指した自分を否定された気持ちになるのだろう。ストイックさは一見強く見えるが、実は脆い。一方[2.0]で挑んだ学生は「否定された」とは捉えない。双方の価値観に相違があったと捉え、むしろ不合格は互いにとって良いことだと前向きに捉える。

適職

そもそも適職とは何なのか、という問いはオトナにも難しい。長年携わってみて初めて分かることで、ましてや経験が少ない学生にはさらに困難。いくら業界研究や企業研究をしても、インターンシップに参加しても、理解は表面的なことに留まる。[2.0]はそれが学生の自然の姿であり、努力不

足でもなんでもないと捉える。

なお補足するが、業界研究や企業研究はやはりするべきであり、インターンシップにも参加するべきである。それでも深い理解に至るには限界があり、それでよいという考えである。

仕事を選ぶ基準

では、何をもちてキャリアの選択をするのか。それは、本人の抽象的な価値観である。

[1.0]は就職そのものをゴールとするのに対し、[2.0]は自己実現をゴールとし仕事は手段と捉える。

キャリアにおける理論で「計画的偶発性理論」というものがある。これはスタンフォード大学のジョン・D・クランボルト教授が1999年に発表したものであり、「個人のキャリアの8割は予想しない偶発的なことによって決定される」とし、それを証明している。この理論は[就活2.0]のエビデンスの一つとなっている。

新たな手段「シューラボ」

以上の理論に基づき、新たな就活の手段を体現化した形を作り「シューラボ」と名付けた。

これは、学生自身が将来のキャリアや人生を築くにあたり大事にしたい「価値観」を企業の前でプレゼンし、企業側から「仕事の提案」としてオファーを出してもらう形式。

これらにより、学生と企業はより深い部分での接点ができることが分かってきた。さらには、両者における先々のエンゲージメントの深さにもつながると考える。



シューラボでプレゼンする学生

予想ができない世の中、多様な価値観

「就活2.0」はまだまだ始まったばかりであるが、学生は自信と勇気を持ち、強制せずとも自らモチベーションを上げることができている。

不安定かつ予想ができない世の中において、安心できる仕事はもはや存在しない。そのような中、何を抛り所に学生は就活を進めていくのか。それはもはや、本人の中にしかないと考える。

多様な価値観が認められる現代にこそ、このような方法はさらに必要になってくるはずである。